# 徳次郎石の研究
## ～「日光石（いし、せき）」として、日光石材株式会社とその時代～

中川　博夫（元宇都宮市立富屋公民館）

## １．序　論

徳次郎石は、徳次郎山（田中山・石山等呼称がある）から産出される石で、当会、凝灰岩研究の会名の由来となった石である。この石には別にブランド名「日光石」が付けられ、日光石材株式会社によることは、あまり知られていない。

徳次郎石の歴史をたどると、実証的には江戸時代よりつづいた地域民の採石の文化が、その平成２年の終焉にかけてまで、最後に花開いたのがこの日光石材㈱の時代であったとしている。「その後、はかなくも散った。(筆者　明日に伝えたい富屋の郷土史Ｐ103　Ｌ６)」としている。

図１．①日光石材㈱の採石場地図
②最後の立抗の地点

会社の活動は昭和40年代である。主な取引先は京阪神が中心で、ついで千葉方面へと続く。野州石造文化を追いかける筆者にとって、せいぜい県内地域各地と見ていた常識からは、この商圏は奇異とさえ感じられる。大谷界隈の、日光石の出荷は、ごくわずかなものとされている。

筆者は、平成８年の宇都宮市制百周年の節目に、宇都宮市富屋地区の社会教育に携わり、地元の人々と共に、徳次郎石の歴史的記録を後世に残す事業を預かった。その結果、徳次郎の石産業は、江戸時代から農間渡世と一般的に説かれているが、筆者は必ずしもこの範疇で全てを論じるのは賛成していない。五街道の一つ『日光街道』の街道文化として、多くの知見の流入があり、石屋根の技術で先行し、徳次郎石工は一部徒弟化している。徳次郎の彫刻屋台と比し、徳次郎石工の彫刻はさらに見事である。まだ当時、数名の徳次郎石工が存命であり、面談の記録に残せたのは、もはや幸運としかいいようがない。そのすべての方が無くなった今、生の徳次郎の石工社会を聞く機会の術はない。大変な、真実の徳次郎石の記憶を預かっているとすら思っている。

これらの歴史の中で、徳次郎石の採石業者として忽然と現れたのが、日光株式会社である。「日光石」のブランドを引き下げたまでは知られていたが、その実態がわからず不思議な感じを持ち続けてきた。

しかし、突如進展を見たのは、平成８年に取材をした同社の専務取締役の岡本勝の長男で元日光石材㈱最後の社員、岡本博幸の存在を知ったことからだ。現在も、石材業を営み、取材に協力をいただけることを取りつけた。やっと日光石材㈱のベールに包まれた全体像にたどりつくことができた。

これらをもとに、日光石材㈱の成立と終焉、その後の大谷石材業界に与えた影響を検証してみることにした。そして、同社の影響は、その後の大谷石材業界のたどった、大谷石材協同組合と各社の道筋の分水嶺として、大きな位置を占めていると考えた。詳論は届かないが、日光石材株式会社とその時代は、今の、大谷石材業界の置かれている地位と酷似していると思えてならないのだ。

## ２．日光石材株式会社の成立と解散

### ⑴　商業登記簿の調査

①設立　　昭和40年１月23日
　　宇都宮大谷町1057番地（商業登記簿）
　現在は　増渕建設木材工業㈲である。
　　資本金　600万円
②移転　　昭和43年１月５日
　　本店を移転する
　　宇都宮市宝木本町1813番地（商業登記簿）
　　その後は、㈱名新　を経て、平成17年11月より、現在は　ネッツトヨタ　栃木株式会社総合物流センター　となる。

写真１．日光石材㈱の仁良塚の社屋・加工所（宇都宮市宝木本町）の場所、かつての日光石材㈱の面影はない

③解散　　昭和54年12月２日（商業登記簿）
（日光石材㈱の写真を探したが見当たらなかった。）

## ３．現存する日光石材株式会社の資料

ほぼすべての資料が廃棄されており、次により発掘するしかない。

⑴　法務局　商業登記簿

⑵　徳次郎石工協同組合資料（共有石山組合）　組合長持ち回り（当会　池田貞夫コピー保管）

⑶　徳次郎石工取材メモ　平成７年当時の現存する徳次郎石工等に、筆者　中川博夫の調査面談の記録がある（宇都宮市役所職員の自主研究グループの『徳次郎石の研究』の報告書として、宇都宮市人事課に提出したもの）

⑷　当時の社員　岡本博幸（日光石材株式会社㈱の専務取締役の長男）現存する最後の関係者。現在㈱マルオカの前社長　より聞き取り調査を行う。

⑸　事務所所在地の調査　現地調査を行うが、事務所所在地付近近隣者には、その所在すら、確かな話は出なかった。(大谷町・宝木本町　共に)

## ４．日光石材㈱法務局商業登記簿　役員の推移（大谷石材協同合員にかかる者は、大谷と表記する）

⑴　１丁（昭和40年11月17日登記）　※この役員の全てが、当時の、大谷石材協同組合員であった。
代表取締役　渡辺三男（大谷）　注：大谷石材協同組合の当時の理事長
取　締　役　渡辺三男（大谷）／高栖孝三（大谷）／小森正治（大谷）／池田晃造（大谷）／谷口己之作（大谷）
谷口與作（大谷）／鈴木康友（大谷）／池田正昭（大谷）／半田純一（大谷）
監　査　役　渡辺宏之（大谷）／池田千秋（大谷）／須藤芳郎（大谷）

⑵　２丁（昭和42年12月19日登記）　＊役員のうち３名が大谷の石材業者である。
代表取締役　嶋中利男（大阪府高槻市千代田町17番19号）
取　締　役　嶋中利男／入江一男（大谷）／谷口與作（大谷）／小森正治（大谷）／嶋中時貞／弦本勇
中村英雄／野口長三
監　査　役　辻順次郎

⑶　３丁（昭和４４年10月１９日登記）　＊役員のうち２名が大谷の石材業者である。
代表取締役　嶋中利男
取　締　役　嶋中利男／岡本勝／谷口與作（大谷）／小森正治（大谷）／嶋中時貞／弦本勇／中村英夫
監　査　役　辻順次郎

⑷　４丁（昭和４６年12月31日登記）　＊役員のうち２名が大谷の石材業者である。全て重任
代表取締役　嶋中利男
取　締　役　嶋中利男／岡本勝／谷口與作（大谷）／小森正治（大谷）／嶋中時貞／弦本勇／中村英夫
監　査　役　辻順次郎

⑸　５丁（昭和４９年12月29日登記）　＊役員のうち２名が大谷の石材業者である。全て重任
代表取締役　嶋中利男
取　締　役　嶋中利男／岡本勝／谷口與作（大谷）／小森正治（大谷）／嶋中時貞／弦本勇／中村英夫
監　査　役　辻順次郎

## ５．日光石材株式会社の設立とその時代

### ⑴　日光石材㈱と、その実働の期間

当会　池田貞夫の調査資料からして、同社と「共有石山組合」(徳次郎石工同業組合）双方の協議がある、昭和39～昭和49年が実働としては確実である。これについて、筆者資料は、開始昭和38年として、これは準備期間とみる。(脚注　あすに伝えたい富屋の郷土誌)

一方、商業登記簿は、設立、昭和40年１月23日登記～解散、昭和54年12月２日と記載され、双方に多少のずれが生じている。終焉は､｢共有石山組合｣との協議のない翌昭和50年中半が最終と考え、昭和39年⇔昭和50年（半ば）が実働期間と考える。又以下で、岡本博幸によると、翌年の昭和51年に、同敷地に新会社『名新』が立ち上がったとしている。

### ⑵　日光石材株式会社設立の動き

これからして、設立への動きは、昭和38年か前ごろとみる。上記、１丁記載のメンバーに注目する。これ

は大谷石材協同組合員で、当時の大谷の石材業の有力者達らがこぞって名を連ねている。これは例を見ない合同で、大谷石でない徳次郎石という新規素材で立ち上げている。大谷石と徳次郎石は、材質的に異なり、基本的には、味噌の少ない徳次郎石の市場可能性を希求したことは、実験的ともとられる。この時の、大谷全体の生産額を、大谷石材協同組合の資料で見ると、列島改造論等で需要による急速に伸びた、昭和48年にピークに達するまで、石材各社は需要に追いつかない程であったとも伝えられ、如何に好景気に沸いたかが伺える。（巻末　付録１参照）

かかる状況を踏まえて、日光石材株式会社の設立は何を意味するであろうか。関係者がいない今、筆者として気の付く点を整理してみる。

●絶頂期こそ、先見性のある経営が必要なことだ。大谷石の欠点とされる､｢味噌｣などの不純性のすくない、緑色凝灰岩で、魅力ある岩質の石を求めておく必要である。このテストケースとして、大谷石材協同組合の各社合意の上、徳次郎石にかけてみることにした。

●とりあえずの、好景気の各社の剰余金のはけ口として、近接産地の、徳次郎石に投資してみるとする。

●後述の徳次郎在住の石工の証言よると､池田千秋と徳次郎石工　入江幸一により､徳次郎石の材質と市場性、埋蔵資源などについて話をした形跡が筆者のメモから出てくる。

⑶　**日光石材株式会社の現在の採石現場**（同社では「田中山」と呼んでいた）

写真２．日光石材採石場
提供：当会　小林基澄
（現小山工業高等専門学校）
岡本は、この奥に①の元の立て坑があるという

写真３．日光石材採石場付近
提供：当会　小林基澄
（当時　宇都宮大学博士課程）

写真４．最後の立抗　西側尾根沿い
図１②（約100m図１①の西）
提供：当会　池田貞夫

【図１】日光石材㈱の採石場所の地図上は地点で、現場は写真２～４である。最初の立て坑は写真２の付近、最後の立抗跡は写真４で現在 「立ち入り禁止」となっている。

採石後、尺角サイズの規格品は現地で製造し、仁良塚の加工所までトラックで、徳次郎　国道293号経由で搬送された。岡本博幸に当時の状況を筆者のノートに描いてもらった。

図２．仁良塚までの搬送ルート

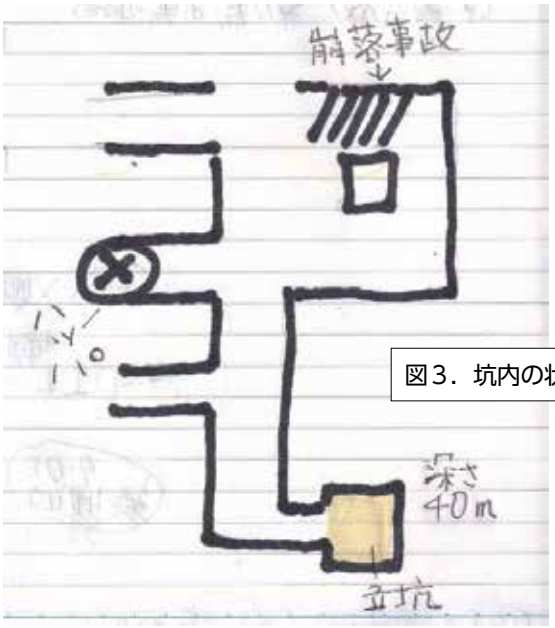


図３．坑内の状況

【図２】 かつてのルートの現況は、一部草木にあり、当時の道がわからない部分もある。ドッグレッグしている箇所は、トラックを切り返す事もあり、苦労したという。
【図３】 坑内の記憶である。死亡事故の箇所、ハッパをかけて開発した箇所が描かれている。立て坑の深さは、最大40メートル位か、階段で降りる。最後に掘った立て坑とはじめのとは、繋がっていたという。

## ６．筆者中川取材メモ（平成７年頃）から、日光石材㈱の関連の事項を探る。

筆者には、平成７年当時徳次郎石工に面談の記録がある。市職員の自主研究として「徳次郎石の研究」が認定され、その成果を人事課へ提出資料である。この記録から、日光石材㈱の関連事項を探り、そのままを次に記載する。

⑴ **入江　幸一**（故人・大正元年12月６日生まれ） 取材年月日　平成７年９月５日
戦後、東京にて石材建設業に従事　その後日光石材㈱に勤務
徳次郎石は、大正12年から昭和８年まで石切りを行う
・入江は、池田千秋氏に、田中山の採石を助言したのは自分としている。
・当時、田中千秋は、特徴ある石を求めていた。結果、船生石・白河石に関心を寄せた。
・日光石は、大阪でキャバレーの貼り石等でブームとなっていた。
・日光石材は、瓦作（かわらさく）で裁断して、２トン車で輸送をした。(会社創立の当初は、加工所は瓦作であった模様である。その後、仁良塚に移転する。)

⑵ **池田　武夫**（故人・昭和５年10月20日生まれ） 取材年月日　平成７年９月３日（日）
・日光石材㈱では、昭和39年より、丸ノコとチェンソーを使用した。
・日光石材㈱では、流門状のものを始めは、邪魔者であったが、貴重品になった。
・ちなみに池田武夫は、戦後、板橋石（日光市）の採石も行った、徳次郎石最後の石工である。

⑶ **岡本　　勝**（故人・大正４年12月28日生まれ） 取材年月日　平成８年１月15日
（日光石材株式会社　専務　取締役　愛媛県松山市出身）
・松山市で建設業を営み、その後大阪で建設業を営む。
・大阪の資本家から、金は出すから、徳次郎石の権利を買って、経営しないかと持ち掛けられる。
・昭和44年、53歳の時、日光石材㈱に所長として来る。
・その時、大谷の10名余が業務をしていたが、権利と人員を全て引き継いだ。
・従業員は、よく仕事をやってくれて、始めてから７－８年は、業績は良かった。
・会社を止める、３カ月の期間は、製品になるものは、何も出てこなかった。
・この時、１月の運営費用は、500万円かかった。500万円×３か月が持ち出しだった。
・日光石の人気はまだまだあった。最後は自分が清算を決断した。そして、徳次郎石工組合の議を経た。
・最後は、機械類も全て売った。
・私は、徳次郎山全体が、玉石だと思う。
・日光石材を運営して、良い層に出くわすと、100本切ったら100本使える。次の層までは、１本も使えるものはない。そういう、性質の山だ。
・主な出荷先は、大阪・奈良で６割。埼玉・千葉（銚子）で３割。10トン車で、月３～５台出荷した。

## ７．岡本　博幸（日光石材㈱の最後の社員）への取材。(2021．10.10)

これにより、長年あった、徳次郎石の最後の核心部分にやっと辿り着いたと思えた。この段は、Ｑ＆Ａの実際のインタビュー形式で記録させていただくことにする。

写真５．岡本博幸は、日光石材㈱について最後の証言者となったと語る

Ｑ：日光石材株式会社の最後の生き証人となりますね。
Ａ：従業員のすべての方が亡くなられました。
Ｑ：平成８年１月15日　元　日光石材株式会社　専務取締役　53歳で松山市からこられた、岡本勝さんに「徳次郎石の研究」で、日光石材㈱の取材でお会いしております。
Ａ：私も15歳の時、愛媛県松山市から宇都宮の宝木本町の日光石材株式会社に入社した。自分が一番下っ端だったので、当時の経営のことはわからない。新人の頃は、皆さんもそうでしょう。　～然り・(次に、一番知りたかった質問を浴びせた。)
Ｑ：昭和39年には稼働していた会社は、昭和42年に経営権を、渡辺三男氏

から、嶋中利男氏へ譲渡されていますね、多分、業績は右肩上がりの時、この理由をしりたい。

Ａ：それは、分かりません。資本金ははじめから嶋中さんが出していた。単なる想像ですが、小森正治（大谷）氏が介在したとおもいます。(筆者は、池田千秋さんと思うが)

Ｑ：なぜ、嶋中さんは、大阪府高槻市の方にもかかわらず、関東のしかも、宇都宮の徳次郎山の日光石材㈱について投資したのでしょうか。

Ａ：それもわかりません。当時大谷は、全国から多くの仲買人が、いい石を求めてきていた時代でありました。さらに、大谷石は大阪でも小売りをしたり、造園や土建業をしたりする者が、少々点在していました。入江一夫さんは、大阪で工務店を開業していました。

Ｑ：日光石材株式会社が稼働して、昭和42年に、経営陣はオール大谷から、小森正治氏とほか2名が残ったのみで、高槻市の嶋中グループ中心になりました。ここで、池田氏等は会社から下りて、いわゆる、小森ＶＳ池田の路線の違いの構図が見られますが。

Ａ：小森さんも会社に見えておりませんでした。

Ｑ：嶋中利男氏は、どんな人だったのでしょうか。

Ａ：高槻市で手広く事業を手掛けた人です。結婚式場・ボーリング場・建設会社等を、経営しておりました。その建設会社の石材部では、日光石は建材や造園に使用されていました。しかし、北陸で大手建設会社と組み観音像を造る等の観光開発、それが原因で破産しました。たまに、日光石材㈱には、黒色のベンツで運転手付きで来ていました。

Ｑ：初めから、ブランド名を『日光石』と決められていたのですか。

Ａ：それは、嶋中さんによって名付けられたもので、それまでは徳次郎石の名で扱われていました。
そして、日光石材㈱は大谷石材協同組合にも加入しました。審査が結構厳かったと記憶しています。

Ｑ：作業工程は、どのようなものでしたか。

Ａ：田中山で、採石後、３尺×１尺×５寸の製品はつくり、徳次郎側にトラックで国道293号におろし、仁良塚の加工所に搬送し製品にしていました。加工所では、板版（貼り石）の製品を主に製造しました。マントロピースとか花瓶（内部を樹脂加工）も少々をつくっていた。

Ｑ：出荷先は、

Ａ：やはり、京阪神が７割、関東方面千葉が２割。週２～３回　大型トラックで出荷します。地元、大谷界隈には、１割少々、問屋に行くからその先はどうなったか分からない。

Ｑ：千葉に出荷とは、

Ａ：多くの仲買人が石を求めて大谷に来た、千葉方面の仲買人さんの希望によるものかもれません。

Ｑ：昭和45年に死亡事故がありましたね。おそらく、徳次郎石史上唯一のものかも知れません。

Ａ：ものすごい爆音と砂煙。そばにいた私は、腰をぬかしました。３名が被害、１名が救出、２名の方が亡くなりました。１地方新聞に載りました。ご冥福祈るばかりです。危険師には、常時見てもらっていましたが。

Ｑ：日光石材㈱の採石場では､有名な魚の化石《ソラスズメダイの一種》が発見されて､宇都宮大学に出されて、現在は、栃木県立博物館に保管されています。(本研究会報告書　2019年版写真掲載)

Ａ：その他､｢燃えた黒い木｣・｢貝｣などがたくさん発見されて、宇大に届けました。どうも、空気に触れると形が残らないのかもしれません。

Ｑ：会社が清算になりますよね。いよいよ、よい石材が出なくなったと聞きますが。

Ａ：最後の試みに従来掘っていた、西側に立て坑を掘ります。そこでは、塀などの製品サイズの半分のものしか取れなかった。(注：現在、立ち入り禁止になっている)

Ｑ：その後は、岡本さんはどうされたのですか。

Ａ：四国に帰るとの話も出たが、残り、大谷石の石材業の会社を起こし、併せて、その後の㈱名神にも参加して現在に到ります。伊予人の魂とでもいうのでしょうか。

Ｑ：日光石材株式会社は、大谷石材協同組合によりその同志で生まれ、関西資本であった。大谷石材業界の稀有なストーリーです。この会社は、その後の石材業界に少なからぬ影響を与えたと思います。このビジネスモデルの成功が、何より、大谷石にない素材の石を求めて、県内外の各地に進出に繋がっていく。同時に、大谷石の廃材を利用した新素材の会社も起こる。時代に向けた新しい事業に展開していった。それは、日光石材の成立と時代、次を模索する現在と酷似しているような気がしてなりませんが。

Ａ：確かにそのようなことは言えると思います。日本遺産などで、大谷石の新たな展開の時代に入りました。清算の翌年、日光石材㈱の仁良塚の社有地に成立した、㈱名新に父の岡本勝が参加し、私、博幸が後に資本参

加をすることになりました。そして㈱名新は倒産し、実はうちも負債をかぶりました。(ひどい目にあった)
Q：最後に、採石の構内の状況を記憶の限り書いてください。(前掲　図２・３)

脚注：専務取締役　岡本勝（故人）等の記録と岡本博幸でいささかの違いがあった。敢えてそれを統一化しないで掲載しておく。筆者の感じでは、この博幸の記憶が一番実際に即していたと思われる。

## ８．池田千秋と小森正治の対立

大谷石材協同組合をめぐる、両者の派閥的対立は、伝聞される所である。この発端は、日光石材㈱にあったのでないか。

まず、この両者共に、大谷石材業に多大なる大谷石採石の近代化に機械を導入した足跡を残している。それまで手掘りであった方法を、機械堀に変えたのも、この二人である。昭和30年代前半、フランスから石材機を輸入した、大谷石製材用に改良して､｢のこぎり歯｣(丸ノコ）を開発したのが、池田千秋である。これからチエーンソーを開発したのが、小森正治である。当初は特許は個人所有であったが、両者とも大谷石材協同組合に、特許権の移管を行う。こうした両者の努力によって、昭和30年代後半からの、機械化により大量生産の時代が到来することになる。

そこで、日光石材㈱の足跡をたどると、昭和40年11月17日登記の設立には、取締役　小森、監査役　池田といわば新規事業ともいえる、徳次郎石のへの展開に志を同じうしている。

しかしながら、２丁の昭和42年12月19日登記によると、経営の実権は、嶋中利男の大阪資本にうつり、池田等が去り、小森がその会社の終焉迄支える。この辺に、対外路線をめぐる両者の相違の発端が見られる。池田はとりわけ徳次郎石や白河石に関心を寄せ、小森派は、船生石を石材に展開することになる。

やがて同組合においての、製品値上げ論争へと発展する。これは、実務派の小森と理論派の池田の感情的な違い、対外進出の違い、オイルショク後の不況下をどう乗り越えるかの、見解の相違と見てとれる。かくたることは、業界全体の隆盛期に余力があってこその現象かも知れない。繰り返すが、両者は大谷石材業者の偉大な足跡を残したことは疑う余地がない。

駐：これら両者の「電動採掘・裁断機」の開発には、谷村鋳造所（現　谷村電機㈱）が、当時、宇都宮市旭町の工場で製造に当り、北海道から九州にまで出荷されている。しかし現在、新製品の製造がないため、既製品でしか対応できず、石材事業継続の課題であるという。(大谷石材協同組合)

## ９．日光石材㈱の終焉

当初から好調な展開を見せた業績は、阪神地域の需要を仰ぎ、経営的には問題は聞かない。しかしながら、突如、資源の枯渇という形で、会社が終焉を迎えることになる。岡本博幸によると、最後の試みとして、西の尾根に、100mの地点に立て坑をほり、徳次郎石の層に向かって、垣根堀を試みた。しかし、十分なサイズの石が取れなかった。

その父岡本勝によれば、会社を止める３カ月間製品となるものはなにも出てこなかったとしている。最後は、自分の判断で会社の終止を決め､｢共有石山組合｣(徳次郎石１組合）の議を経て最終決議となる。最後の３カ月は、500万円×３か月＝1500万円の費用の持ち出しだった。最後も従業員は14 ～ 15名で、機械類は全て売却して清算した。従業員はよくやってくれたとねぎらい応分の金額が支払われている。さらに、岡本勝はその後社有地にできた、入江一夫の大谷石二次製品の「明新」に参加し、又自身、㈱マルオカを起こし大谷石販売業にも転じる。この経営は、息子　博幸　現在孫の　直樹　と移っていく。

## 10．日光石材㈱のその後

### ⑴　対外進出

日光石材㈱の、新素材の展開、ブランド名を付けての、販路拡大の戦略は成功したと見られる。この後の大谷石材業界の進出の一端を次に見ることができる。又、会社後の敷地を引き継ぎ、大谷石の廃材を利用した、第二次製品の開発、新たな会社の設立が行われる。

白川石　⇒　池田千秋
船生石　⇒　小森石材店・(有)大幸石材店＝最後の採石業者となる・沼尾石材店
芦野石　⇒　大谷石材商会・碓井
小砂石　⇒　大谷石材商会　・碓井

大網石　⇒　金沢石材店・渡辺石材店・永岡
日光石材株式会社　の跡地　⇒　株式会社　明新＝大谷石の砕石の二次製品の生産を行う

⑵　㈱名新の起こり

岡本博幸によると、入江一夫が、株式会社「明新」(昭和50年７月24日～平成29年12月３日　商業登記簿)を設立する。コッパをセメントや硬化剤で固め、大谷石のブロックの製品化を行い、大谷石の廃材の二次製品としての加工所となった。この大谷石の二次製品の開発には、小野田セメント（現太平洋セメント）と㈱明新の共同開発。具体的には、葛西工学博士と元日光石材㈱の専務の岡本勝の共同作業で行われる。開発の期間は一年半であった。当初の粉材の混入では強度が悪く、骨材注入により製品化の成功にこぎつける。

二次製品の大谷石の販売は当初好調であったが、経営権が入江の弟に移った後、中国製の黒御影が出るようになって、衰退し閉鎖する。かつての日光石材㈱の所有地は、 嶋中⇒入江　へと移る。現在のネッツトヨタ栃木株式会社総合物流センターとして清算された。

そして、この流れはその後、現在の『新大谷石』につながる。

（駐：新大谷石の名称は、以前にも使用された様だ）

## 11．日光石材株式会社の取り巻く大谷石材業とその時代

改めて、大谷石材協同組合に提供をいただいた、別添･付録１（P66）の「大谷石出荷高･従業員年代別推移」の資料がある。登記簿からの、昭和40～昭和54年の期間は、昭和48年（1973）の890,000ｔをピークに、大谷石史上絶頂期にあったことがわかる。これを導いたのは、当然採石工程での機械化である。

昭和48年（1978）第一次オイルショック、昭和50年（1980）の第二次オイルショックと建築基準等の規制の強化を経て、大谷石材業も冬の時代へと入っていく。そして、各地に展開した優れた凝灰岩は、ほどなく採石の撤退を余儀なくされた。それらの岩質についての市場の正当評価を得るまでもなくである。その最後は、㈲大幸石材店の船生石（鬼怒石）1998年ごろである。低迷は今日の大谷石の日本遺産にまで続く、やっと現在、底入れした感があり、新たな展開が期待される時代の到来が予見される。

## 12．細谷美夫（元大谷石材協同組合理事長）の回想

写真６．細谷美夫（右）と筆者（左）
撮影：大木雄一朗

筆者は、細谷美夫に集材結果と主張を踏まえ、日光石材㈱の発起から清算までの過程について問うた。断片的な事項のつなぎ合わせと、当時の思い出の結果であると付け加えながらも、設立にかかわった中心人物は、入江一夫と断定した。当時、入江は、大阪で工務店を開業していた。そして大谷石のアンテナショップ的な存在だった。その後大谷に戻ってくる。東京には組織的な、大谷石の販売ルートが確立していたが、なかった関西圏の進出を企んだのだ。

大阪で入江は嶋中と関わっていただろう、それも当初から嶋中の資本であったとする。大谷石材協同組合では、それならばと主要メンバーで会社設立に踏み切る。その時、大阪への進出は、輸送コストが高いとの懸念があったが、期待感が高まり踏み切った。事実、２丁後は、日光石材㈱の所在地の大谷から仁良塚に社屋は移っている。会社清算後も、入江は同じ場所で新会社「明新」を起こす。さらに、進展の関西各地に大谷石にない石材、味噌の少ない「徳次郎石」のブランド名を『日光石』という名での販売戦略で臨んだ。時代的追い風もありこの戦略も成功したとする。日光石材㈱のビジネスモデルは、その後の、大谷石材業の各社の県内外の地に進出に繋がったとする、筆者の考えに同調する。

これに大谷石材協同組合の大木雄一朗は、日光石材㈱の成立には、名神・東名・東北などの高速道路の開通の大量輸送の幕開けの時代的背景が後押したとする。事実、日本の流通革命が、大谷石を含む産業社会に与えた影響は大きいと付け加える。又、貨車輸送での積み替えの手間が省け、玄関から玄関へ、作業現場への直行もトラックなら可能だからだと述べる。

## 13．まとめ

日光石材の㈱の経営資料は、現存していないので売上・経費の金額はわからないが給与の支払の遅滞なく、清算についての支給金も出ている。赤字は最後の３か月のみで、経営は安定していた。大谷石材協同組合の主導により発足した同社は、「日光石」のブランド名を付け高級感をもって京阪神市場に打って出るビジネスモデルは成功した。それは、事後石材各社に影響を与え、県内外の地に進出する契機となった。さらに、コッパや廃材を

写真７．大谷石材協同組合
常に時代とともに歩み続ける司令塔でもある

利用した今日の『新大谷石』にもつながる展開の糸口となった。

かつての日光石材㈱の時代的趨勢は、石材業界において、現在置かれている環境と酷似しているやに見える。現在、大谷石文化の日本遺産の認定以降、長い停滞期間からやっと上げ潮の方向になってきている。これを踏まえて、地産地消ともいえる石文化（広義の意味も含む）は、何を理念に、目標として、社会とともにあり続けるべきものなのであろうか。

町や村の風景を構成する大谷石等は、この地になじみ、人は自然に潤いを感じる。その人の立つ地下にあるその石（大谷石等）は、にじみ出るが如く人々を構成する何かがある。それは人々の持つ、アイデンティテイかもしれない。換言すれば住む者の『粋』として生き続けているのでなかろうか。

時代が進めば進むほど、建物などはコンパクトなものが受け入れられややすい。快適な効率性は、時代の推移であろう。しかし、住文化が全国統一的であることは味気ない。石器時代からつづいた、住生活に溶け込んだ自然石との付き合いが、これで終わりである筈がない。必ず、生活のどこかに、故郷の自然石をとりいれた創造がこれからも続いていくだろう。しかし、かつての自然石が建築や造成の主力になる時代は、今後訪れない。

大木雄一朗は、この先にあるのは、アートの世界であろうと述べる。自然石によって想像されるアートは、どれ一つ同じものはない。この凝灰岩は、時の経過と共に変形して、干からびていく。人の人生の一生と同じ様なものだ。だから、自分の人生を愛しむように、観賞して、家族のように労わって、いきたいものである。日光石も流文状の文様の板版が、自然アートとして価値があったのが先例と見える。

さらに大木は、相対的価値観を『世界』に求めることを主張する。世界の石の文化を吸収し、対比し、競うべきは競う。クオリティの高い石文化の創造は、かつて、日光石材㈱が目指し、室内装飾等に利用した。かつての関西はもはや世界である。石の創造的芸術の世界的拠点を、石の里 「大谷」等に作りたいと説く。

さらに筆者は、今日的課題として、次のことを早急に付け加えたい。

一時代前に点在した、野州（栃木県）の石産地は大谷・徳次郎・長岡ばかりでない。大谷石百選には、21箇所が紹介されている。そのほとんどが、何も語られないまま忘却の彼方に追いやられようとしている。野州石造文化圏というくくりで、県内各地の特に凝灰岩の採石について、早急に調査を行う必要がある。関係者が日々喪失していく現状からして、行政・各郷土史家等の協力を仰ぎながら進めたい。どんな景観や石造文化があるのか未知との遭遇の期待がある。これは、日光石材㈱の影響により、石材業者がかつて進出した各地以外と一致している。次の時代は、機械堀りながらも坑内の人的作業を、ロボットなどでリモート採石などの時代へ向かっている。過去にも組合で研究会を行った記録もある。

日光石以降は、徳次郎石は、わずかに地元の数名の個人採石の手掘りにより、平成２年の春、池田武夫が山を下り、その歴史に幕を下ろすことになる。

それにしても、京阪神地区を中心に受け入れられた、「日光石」は、今、何をしているのであろうか。

＊本稿は、敬称を省略させて頂きました。

## 参考文書


明日に伝えたい富屋の郷土史「徳次郎石の歴史と文化」 中川博夫（筆者　当会）
宇都宮市立富屋公民館及び宇都宮市制100周年富屋地区イベント実行委員会　平成９年３月31日
宇都宮市史　第７巻　近・現代編１　第７章　大谷石材　宇都宮市　昭和55年３月25日
市政研究うつのみや　第17号　～まち・むらの持続性とアイデンティティ～　2021.３（令和３）
〇徳次郎「とくじろう」から「とくじら」へ　池田貞夫（当会）
＊本会名に由来する地名が関連する
〇星が丘１丁目大谷石畳道路（星が丘の坂道）完全復元　中川博夫（筆者　当会）・大類智樹
＊筆者達が、大谷石と住民的アイデンティーについても論じる
大谷石と労働　栃木労働基準局編　昭和42年９月



**協 力 者**　大谷石石材協同組合（理事長　石下光良）・大木雄一朗
細谷　美夫（元大谷石石材協同組合理事長・元宇都宮市議会議員）
岡本　博幸（㈱マルオカ　前代表取締役）